

## 道夫のコレクション

### ツキノワグマの剥製

道夫が友人から譲り受けたもの いずれかえそうと思っている

### 木彫りの熊

ほとんどは、道夫が東京に行った時に覗いた蚤の市で購入したもの この内の一つは、六年前に女川町の浜辺で見つけたもの

### アンモナイトや珊瑚

道夫がクマの剥製に逢いに国立科学博物館に通うようになってから、興味を持って何となく集めたもの

### マンモスの毛

科学博物館の土産物売り場で千数百円で買える

### イギリスの熊の銅版画

蚤の市で購入したもの イギリスでは、遠い昔に熊は絶滅しているので、野生の熊を描いた絵は珍しいとのこと

### ウィスキーを抱く熊

道夫がガラクタ屋で購入したもの 1960年頃ニッカウキスキーが販売していた『ベアーニッカ』のノベルティ 『ベアーニッカ』はもう売っていないので、近所で適当なウィスキーを買って抱かせている

### 大きな写真

上野の国立博物館の展示品を道夫が撮影したもの

### ミニチュア

道夫が集めたものに道夫の孫が集めたものが混ざっている

## 「BEAR BEER」の空き缶

東京での道夫の常宿近くのスーパーマーケットで売っている

## 「Boat Bear」のオルゴール

道夫の家族が納戸を整理していた時に見つけたらしい いつからそこにあったのか誰も覚えていない

## 【 東の熊、青い森の幽霊 】

本作は、同名の個展〈東の熊、青い森の幽霊〉のための書き下ろし

著者：大久保 あり

十和田奥入瀬プロジェクト「まちなか美術館」(十和田市現代美術館)

会期…2017年3月3日 - 3月26日

会場…エースカメラ(旧店舗名)

写真店の店主、宮沢道夫は、最近になって足しげく東京に通うようになりました。店主といっても数年前に店は閉めていたし、贅沢もしてこなかったから多少の蓄えはありました。どうして道夫がひと月かふた月に一度ほど東京に出向くのか、その理由というのは、道夫が子供の頃に出会った熊に会うためです。道夫の家族は、最初は訝しがっていましたが長年まじめに暮らしてきた道夫を止めることはしませんでした。

道夫が小学校の一年生の時、叔父さんが死にました。叔父さんは、東京の大学を卒業してからそのまま研究員として大学に残っていました。「アダマのナガに血イ出てまっダ」と当時聞いていた道夫の父さんの説明が今でも道夫の耳に残っています。

込み思案で、ゆき交う人を捕まえて、道に迷っていることを打ち明けられる筈ありませんでした。おまけにほんとうにたよりのない幼子だったけれども、涙一つも流さないので、大人たちは道夫が困り果てていることに気づいてはくれませんでした。

「ワ、こゝでヒドリで生きていかねばなんねんだナア…」と道夫が途方に暮れていた時に、目の前に黒い塊がゆらゆらと覆い被さってくるように現れました。それは、大きな大きな赤松の太木のようなクマでした。道夫が驚くよりも先に、クマは全てを分かっているよといわんばかりに道夫の肩を抱きました。とても暖かく、獣の息づかいを全身で感じ、道夫は安堵しました。そうしてクマは、道夫の手を引いて歩き出しました。その大きなはたきのような手の先に物騒な爪があることを道夫は当然分かっていましたが、不思議と危うさを感じませんでした。クマは迷路のような路地を何の躊躇もなく、目的地に進んでいるようでした。その歩みはゆっくりと歩いていても鈍くはなく、とても心地良いものでした。道夫は自分で歩いているのに快適な乗り物に乗っているような、そんな感じを味わっていました。

あたりが段々と藍色に染まって遠くの空に少しだけ橙色が残っている時刻、クマはいつのまにか消えました。そのかわりに目の前には道夫の父親が立っていました。

道夫は、一度きりだけ遇ったクマのことを忘れることは、ありませんでした。高校生くらいになると、あれは幻だったのかもしれないぞ、と自分自身に問うてみたり、子ども時代につまらぬ作り話していたのだと思おうとしました。けれども、大人になって年を重ねるにつれ、クマとの遭遇とその満ち足りた感覚が現実であったという確信が道夫の中に湧いていました。

そうして、道夫はクマに会うために東京にゆくようになりました。元写真店兼住居のこの家を出て、東京までは、当時の三分の一以下の時間で到着できるようになりました。幼い頃の道夫が道に迷って途方にくれていた場所が死んだ叔父さんが勤めていた東大ともさほど離れていない場所だと分かりました。それよりもその近所に上野の動物園があった、あの優しいクマがああ時、動物園の檻を出て、散歩に出たところで偶然道夫に出くわしたのではなからうか、

「道夫はオジさんと※ケヤグおんた仲良がったんだぞ」と父さんは、いいました。道夫は、本当はあんまり覚えていなかったけれども、そういわれてみればそんな心持ちがしました。父さんはいろいろな理由をつけて、十二時間の長旅に道夫を伴ってゆきました。

茶毘の間、道夫は一人遊びをして過ごしていました。三月の東京は十和田と違って生温く甘い香りがそこら中に漂っています。子猫が楽しそうに通りをスキップして、道夫は思わずついていってしまいました。

初めてきた東京の入り組んだ路地を何回曲がったのかしれません。斜めに傾いた日差しに道夫は、はっと我に返りました。帰り道が分からなくなっていたのです。そこは、十和田とは違う小さな家が建ち並んでいて、あちらこちらから人の気配がしていました。だけでも道夫は人一倍引いた。

上野動物園に通うようになり、数種のクマたちと挨拶を交わすようになって暫くたってから、ふと道夫は、あの時のクマはもうとつくに天寿を全うしているのではないだろうかかと気づきました。あれから六十年近くの歳月が流れていました。

それから道夫は、上野の公園の同じ敷地内にある科学博物館にもゆくようになりました。そこには、十頭あまりのクマの剥製が展示されていました。道夫は、博物館に幾度となく通って、剥製になったクマの顔を何度も何度もながめました。動物園で死んだ動物は剥製にされて、博物館に入ると聞いたからです。剥製の動物たちの表情は造られていきます。結局は皮だけになっています。あの時の暖かいクマを見分けることはできない、と道夫は絶望しました。

ある時、道夫は友人からクマの剥製を譲られました。道夫の本心はそんなものは欲しくありませんでした。けれども、その友人が道夫のことをただの熊好きと思って、善意でくれたものだから断ることができませんでした。しかもそれは、道夫が幼い日に出会ったヒグマの種類ではなく、ツキノワグマでした。道夫は、そのツキノワグマの剥製を運んできた友人が帰ったことを見届けるとすぐに布を被せてしまいました。「許してけるじゃ…」と道夫はツキノワグマにいいました。

今日も道夫は、あの日のクマに逢いに東京に出かけています。

※ケヤグおんた…(南部弁で)親友のように

## 東の熊、青い森の幽霊

### ― 東にて

本作は、同名の個展〈東の熊、青い森の幽霊〉のための書き下ろし

著者：大久保 あり

会期…2017年3月16日・3月31日

会場…HIGURE 17-15 cas

( ここにはクマがいる )

正確にいうと「ひぐま」という珍しい苗字の女性が棲んでいる。

一年ほど前から、ひぐまさんは不思議なおじさんと会うようになった。ひと月かふた月に一度くらいのパースでそのおじさんをこの辺りで見かける。おじさんは大抵、上野動物園のパンフレットを握っていて、首からは、デジタルじゃない一眼レフカメラを提げている。

おじさんは、クマを観に、たぶん東北(訛りから察すると)のどこかからはるばるやってくる。

ある日、ひぐまさんが外出先から戻った時、建物の前で上空を見上げるおじさんがいた。

「あれクマがあ？」とひとりごとのように聞くので、「いえ、あれはラクダですけど、近くで見えますか」と、いつも観光客にするのと同じように尋ねた。

「ラクダだばいらねえじゃ」といって、そのおじさんは立ち去った。

この建物の屋上から、遠くの空を見つめる実物大のラクダの像に興味を魅かれる観光客は大勢いる。だけでも、「ラクダ」と聞いて殆ど無反応、むしろクマではないことばかりしている様子のその人物がひぐまさんの印象に残った。これがひぐまさんとおじさんが初めて言葉を交わした、早春の夕暮れだった。

ある時、おじさんが手に提げたコンビニ袋の中に熊の置物のシルエツトが透けて見えた。

「ウチにも木彫りの熊あるんですよ」  
「それから…」

ひぐまさんが自分の苗字を明かすと、おじさんは眼を細めて、何かブツブツと独りごとをいってうつつむいた。

ひぐまさんがおじさんに会うときは、いつも禍ガ刻まどがときのころだ。だから、おじさんを思い出す時、その顔はほとんど曖昧。ひぐまさんは、おじさんのことを「幽霊みたいな人」だと思っていた。それに、おじさんのほんとうのなまえを

ひぐまさんはまだ知らない。おじさんと会うときは偶然だったり、突然だから、なまえを聞き出す話題になかなか辿り着けない。それに、おじさんは口数がとても少ない。ひぐまさんは、いつしかおじさんのことを「ミチオさん」と心の中で呼んでいた。それはミチオさんのクマへのこだわりが、二十年ほど前にアラスカの地でヒグマに食べられてしまった写真家の星野道夫を思い起こさせたからだ。

ミチオさんと初めて会ってから半年以上経った頃、ひぐまさんはミチオさんが鶯谷のラブホテルを定宿にしていることを知った。自宅にアルプスの風景写真が掛けてあつていつか行きたいと思っていた。そんな理由でミチオさんは、「ホテル・サンモリッツ」という、スイスの地名の付けられたラブホテルに泊まっていた。ラブホテルはあまりにも、と思ったひぐまさんは、このすぐそばの富士見ホテルを紹介してあげた。そのお礼にミチオさんお気に入り「BEAR BEER」を貰った。

それからミチオさんは、動物園にいるエゾヒグマの、あまり上手には写っていない写真を見せてくれた。

「こりゃ、まだ若げえなあ」

ミチオさんは、自分の会いたいクマはヒグマで、生きていれば六十歳をとうに過ぎてはいるはずで、クマの寿命からするとあり得ないことだと話した。

ひぐまさんは、動物園の動物が死んだら剥製にされているかもしれないこと、剥製のヒグマでよければ、動物園と同じ上野公園内に建っている科学博物館で見られることを教えた。それと、東大の中にある総合研究博物館の場所も教えた。それから、木彫りの熊を買える骨董市や動物のミニチュアをたくさん取り扱っているおもちゃ屋も教えた。ミチオさんのクマ探しの旅は、回を重ねることに充実した。ひぐまさんは、ミチオさんがなぜクマにそうこだわるのか、なぜいつも暗くなりかけの頃にこの辺りに来るのか、まだ知らない。いずれ聞けるだろうと思っている。

今日もミチオさんは、クマとひぐまさんに逢いにここにくる。

(There Are Bears Here)

To be precise, there is a woman with the unusual last name of Higuma, or, literally, brown bear.

About a year ago, Ms. Higuma began running into a strange man. She would see him around here once every month or two. He would usually be carrying a pamphlet from the Ueno Zoo, an SLR film camera around his neck.

He was there to see the bears, and judging by his accent, he'd come all the way from somewhere in Tohoku.

One early spring evening, as Ms. Higuma was returning home, she found the old man in front of a building, looking up at the sky.

"Is that a bear?" He muttered half to himself.

"No, it's a camel. Would you like to see it up close?" Ms. Higuma asked, the way she always did with tourists.

"Who needs a camel," the old man said and walked away.

A life-sized camel statue stood atop the building, looking off into the faraway sky, and it drew in lots of tourists. But this conversation with the man, who seemed disappointed—almost unresponsive at the word "camel"—made a strong impression on Ms. Higuma.

Another time, she made out the silhouette of a bear figurine inside of a convenience store shopping bag he was holding.

"I have a carved, wooden bear at my house, too. In fact, my name is..."

No sooner had Ms. Higuma revealed her last name to the old man, than he narrowed his eyes and hung his head, murmuring to himself.

Ms. Higuma always met the old man in the waning twilight. And so, when she thought of him she could hardly remember his face. She thought of him as a kind of "ghost person." She still didn't even know what the old man's real name was. She would always bump into him unexpectedly and had never found a moment to ask his name. Besides, he was a man of very few words. At some point, Ms. Higuma found herself referring to the old man as Michio. This was because Michio's fancy for bears reminded her of Michio Hoshino, the photographer who'd been eaten by a bear in the Alaskan wilderness some twenty years ago.

About six months after she first met her Michio, Ms. Higuma learned that he stayed at an Uguisudani love hotel when he came to Tokyo. In his home, he'd hung a landscape of the Swiss Alps, where he'd always hoped to visit. This was why he stayed at the St. Moritz, a love hotel that had taken the name of a resort in Switzerland. Disapproving of his choice in hotels, Ms. Higuma recommended the nearby Fujimi Hotel. Out of gratitude, Michio gave her a few cans of Bear Beer, his favorite brew.

He then showed her a couple amateurish photos of an Ussuri brown bear he'd taken at the Ueno Zoo.

"Nah, this one's too young."

He told her that the bear he was looking for was a brown bear, and if it was still alive it'd be over 60 years old, well past the plausible lifespan of a bear.

Ms. Higuma mentioned that after they died, the animals in the zoo were often sent to be stuffed, so if he didn't mind a stuffed brown bear, then he might visit the science museum in Ueno, just a few minutes away from the zoo. She also told him where to find The University Museum at the University of Tokyo, as well as antique fairs and flea markets where he could buy carved, wooden bears and which toy shops had lots of animal miniatures. Michio's trips to find his bear became more fulfilling with every visit.

Ms. Higuma still does not know why Michio is so interested in bears, or why he insists on coming to her neighborhood at twilight. Maybe one day she'll ask.

Today Michio is again coming to visit his bear and Ms. Higuma.

Translation by Queen & Co, Ltd.